

マリア・モンテッソーリと祖国イタリア

前之園 幸一郎

〔キーワード〕 国際モンテッソーリ教員養成コース, G. ジェンティーレ,
 ジュゼッペ・ロムバルド・ラディーチェ,
 回勅「青少年のキリスト教的教育」, B. ムッソリーニ

はじめに

マリア・モンテッソーリ (Maria Montessori 1870–1952) はイタリアが世界に誇る教育学者であり幼児教育の実践者である。欧州連合 (EU) がスタートして 2002 年に単一通貨ユーロが出現するまで、イタリアにおいてはわが国の一万円札の福澤諭吉のように M・モンテッソーリの肖像の印刷された千リラ紙幣が使用され流通していた。ところが、一国の文化を代表しイタリア国民にあまねく知られているこの人物は、その実際の人生においては祖国に安住の地を見出すことができなかった。リタ・クレーマーによれば、彼女は「自国では尊敬されない予言者のように」その生涯の後半をスペインとオランダで過ごした。¹⁾そしてその波乱に満ちた生涯をオランダのノルドヴェーク・アーン・ゼーで閉じて、今日もその地に眠っている。本稿における主題は、M・モンテッソーリと祖国イタリアとの関係についてである。彼女の思想形成における転換点に注目しつつ、モンテッソーリの活動とイタリア社会との間に生じた微妙な関係と軋轢について考察を行いたい。

1 ジュスティ通り (Via Giusti) の「子どもの家」の開設と宗教教育

サン・ロレンツォ地区の「子どもの家」は、1910 年にはすでにモンテッソーリの手を離れ、彼女との直接的な関係はなくなっていた。それはエドゥアルド・タラモ氏とモンテッソーリとの不幸な意見の相違によるものであった。

その原因は、サン・ロレンツォの貧民街を一掃して新しい都市住宅の建築を進めるといった目的のタラモ氏の住宅実験よりも、その住宅内に開設された「子どもの家」によるモンテッソーリの教育的実験が世間の大きな関心と呼ぶことになったからである。この住宅建設計画に対する大口の出資者である実業家の一人が、「子どもの家」によって話題を独占したモンテッソーリに対して彼女が個人的宣伝活動を行っているとは非難したのがきっかけであった。ある日、モンテッソーリは「子どもの家」への出入りを文字通り差し止められた。「私は二年間も一緒にやってきたのですよ。それなのに、ある日、門番が上司の命令だと言って私を中に入れてくれなかったのです」と後にモンテッソーリは述べている。²⁾

しかし、その後、モンテッソーリは、ローマのヴィア・ジュスティ (Via Giusti) にある「聖フランチェスコのマリア女子修道会」(Suore Francescane Missionarie di Maria) の敷地内において「子どもの家」を開設した。責任をまかされその中心になったのはアンナ・マリア・マッケローニであった。彼女によると、その修道院の内部は「美しい自然と芸術、花、建築、装飾品を大切に作る心が聖フランチェスコ的神秘主義の単純さとほどよい調和を保っていた。その修道院には約50名の子どもたちがいたが、その大部分はメッシーナ (シチリアの都市-筆者) から来た (大地震の災害による-筆者) 孤児たちであった。教室には50人の子どもが机に向かって座ってもまだ半分以上余るほどの広さがあり、大きなガラス戸が回廊と庭に面していた³⁾」。ジュスティ通り (ヴィア・ジュスティ) は、現在のローマの地下鉄A線のローマ終着駅テルミニから数えて一つ目のヴィットリオ・エマヌエレ駅近くにある。この女子修道会は1877年に受難のマリア修道女 (Madre maria della passione, フランスのナント出身の貴族で俗名 H el ene de Chappotin de Neuville) によって設立されたもので、ここでの「子どもの家」は1909年から1914年まで約5年間存続した。⁴⁾

ところで、サン・ロレンツォにおける「子どもの家」においては、研究上の大きな制約があった。「子どもの家」の教育活動に関する責任者は確かにモン

テッソーリであったが、その行政上の管轄者はローマ市当局であったからである。当然ながら「子どもの家」は教育行政上から見ると公立の教育機関の一つとされ、そこでは中立性ならびに世俗性の原則が尊重されなければならなかった。そのような事情から、モンテッソーリの主要な研究関心の一つである宗教教育に関する実験はサン・ロレンツォにおいては彼女の思うように自由に行うことができなかつたのである。

ジュスティ通りの「聖フランチェスコのマリア女子修道会」における「子どもの家」においては、その宗教教育を自由に行うことが許された。モンテッソーリは1909年の『科学的教育学の方法』（以下、『方法』と略称）の「結論と印象」において次のように述べている。「その重要性をわれわれがまだ十分には実感していない宗教教育の問題もまた実証的教育学によって解明されるべきであろう。もし諸宗教が諸文明とともに生まれたとするならば、宗教はその根源を、多分、人間本性の中に持っているであろう。（…）人間性の中にある宗教的感情をア・プリオリに否定し、人間性からこの宗教的感情を奪い去るならば、われわれは子どもの知ること・学ぶことへの愛をア・プリオリに否定してきたのと同様に、教育学的誤りを犯すことになるにちがいない⁵⁾」。モンテッソーリは、さらに上の文章に続けて米国のウィリアム・ジェイムスを引用して、彼が感情についての生理学的理論を提示し、「宗教的良心」の心理学的重要性を説いていることにも言及している。

これらのことから、モンテッソーリが宗教教育の重要性とともに、幼児には早すぎるとして子どもから宗教教育を奪い去ることは不自然なことだと考えていたことがうかがえる。しかし、彼女はこれまで幼児に対する実証的な宗教教育の実践を行う機会に恵まれなかつた。ジュスティ通りの「子どもの家」に、彼女はひそかにその期待をかけていたかも知れない。そして、そこでは確かに幼児に対する宗教教育が行われた。しかし、その方法は伝統的なカトリックの教えに従うものでしかありえなかつた。善良な修道女たちの好意に満ちた配慮にもかかわらず、その修道院にはローマ教会の伝統的で厳格な雰囲気⁵⁾が支配しており、もろもろの教条（ドグマ）から大きく逸脱するような実践の展開はそ

ここでは望めなかった⁶⁾。したがって、当初モンテッソーリが『方法』において企図していたような実証的な実践は望むべくもなかった。その課題は後述するようにスペインのバルセロナにおける「子どもの家」の実践に引き継がれる。

ここで、ジュスティ通りの「女子修道会」を中心として展開されたその他のモンテッソーリの活動にも注目しておこう。1909年の『方法』の出版とレオポルド・フランケッティ男爵ならびにアリス・ハルガルテン夫妻の別荘であるチッタ・ディ・カステッロのモンテスカ荘における科学的教育学に関する第一回モンテッソーリ・コースの開催以後、「子どもの家」の教育実践に対する世間の関心は急速に高まり、翌1910年にローマにおいてそれぞれに別の二つのモンテッソーリ教育講習会が開催された。最初の講習会はジュスティ通りの「女子修道会」におけるもので、「モンテッソーリ法による子どもの教育のためのコース」(Corso per educare fanciulli col metodo Montessori)をテーマに掲げてマルゲリータ女王の後援のもとに開催された。第二の講習会は、イタリア婦人全国評議会(Consiglio Nazionale delle Donne Italiane)の後援のもとに「E・フォア・フジナート」(E. Foà Fusinato)小学校において「幼児教育の教員養成コース」(Corso Magistrale di educazione infantile)として開催された。それぞれ「子どもの家」において試みられた理論と実践⁷⁾についての方法を教師たちに理解させることを目標とする2ヵ年のコースであったが、そのなかには母親たちも含まれていた。この二つのコースの受講生たちはジュスティ通りの「子どもの家」を参観した。ジュスティ通りの講習会にはマライーニ侯爵夫人、フランケッティ男爵夫人も受講生として出席していた⁸⁾。

1912年5月に『方法』の英語版『モンテッソーリ・メソッド』(*The Montessori Method Scientific pedagogy as applied to child education in "the children house"*)が米国で出版された。発売と同時に大評判となり一週間のうちに初版5000部が売り切れとなり、その年の内に7版が増刷されるほどであった。この年に『方法』は英国では英語版、フランスにおいてはフランス語版が翻訳されて出版された。引き続き1913年には『方法』のロシア語版、ポーランド語版が、1914年にはドイツ語版、ルーマニア語版が、そして1915年にはスベ

ン語版が出版された。このようにしてモンテッソーリ教育は、新しい教育法として耳目を集め世界中から注目されるようになる。

このような気運を背景にしてモンテッソーリは第1回国際モンテッソーリ教師養成コースをローマにおいて1913年1月16日から5月15日まで開催した。会場となったのは、ローマのポーポロ広場 (Piazza del Popolo) のすぐの西側を走る皇女クロティルデ通り (Via Principessa Clotilde) にある彼女の自宅であった。この講習会には90人が参加した。米国、英国の他にインド、トルコ、パナマからも参加者があった。米国女性の中にはアデリア・パイルとヘレン・パーカーストの名前も見られた。引き続いて、第2回国際教師養成コースが翌1914年2月23日から6月30日までローマのヴァチカン市国の近くにあるサン・タンジェロ城を会場に開催された。参加者は89名であり、その中にはオーストラリアからの4名、スペインからの6名、日本、ロシア、ルーマニアからの各1名も含まれていた⁹⁾。モンテッソーリの生涯にわたる忠実な弟子の一人のアンナ・マリア・マッケローニは、その第1回国際コースの開始の様子を思い起こしている。モンテッソーリの母親レニデル・モンテッソーリは1912年12月20日に72歳で永眠した。母親を送り出して間もないモンテッソーリは、喪服のまま自宅において講座を始めたのである。テラスからポーポロ広場とピンチョの丘をのぞむその家には数百人が座れるような大広間¹⁰⁾があった。

多忙な日々を過ごすモンテッソーリは1913年11月21日に最初の米国訪問の旅に出かけ、ワシントン、ニューヨーク、フィラデルフィア、ボストンなどの諸都市で熱狂的な歓迎を受け年末に帰国した。1915年の春に、彼女は、再度、米国を訪れる。サン・フランシスコ万国博覧会において公開のモンテッソーリ法の実践を行うためにである。この同じ年の8月から11月まで米国において第3回国際モンテッソーリ教師養成コースが開催された。それは万博会場におけるモンテッソーリ・クラスの子どもたちの見学と実習を含む講習会であった。このようにモンテッソーリ教育に対する関心と注目は世界的な広まりを見せつつあった。しかしながら彼女の祖国イタリアにおいては、後述するよ

うにモンテッソーリ教育への批判の動きがしだいに強まりつつあった。

2 スペインにおける教育実践

モンテッソーリは、このアメリカ滞在中の11月25日に父親の訃報に接する。彼女はこの悲報とともに急遽米国を出発する。しかし、その向かった行き先は祖国イタリアではなくスペインのバルセロナであった。モンテッソーリはクリスマスの時期にバルセロナに落ち着き、そこに居を構えて生活を始めた。彼女は以前からこの地に生活するように招聘を受けていたからである。その機縁となったのは、バルセロナ市当局から派遣された教師たちのローマにおける1914年の第2回国際教師養成コースへの参加である。「母性と孤児の家」(Casa di Maternità e Esposti)の運営委員会は、カタロニア地方の教育調査委員会の指導のもとに、3歳から6歳半の幼児に対してモンテッソーリ法による教育実験を行うことを1913年に決定し、その任務をファン・パラウ・ヴェーラ (Juan Palau Vera) 教授に委嘱していた。同教授は「子どもの家」の実際を具体的に見学するためにローマに赴き、この教育法に強い関心を抱いた。そこでバルセロナの教育当局に対してローマで開催されている国際コースへ教師を派遣するよう勧告した。それがスペインの2名の教師たちのローマ派遣として実現したのである。他方、モンテッソーリはすでに1915年の初めに自分の最も信頼する弟子アンナ・マリア・マッケローニをバルセロナに派遣していた。そしてマッケローニはすでに「母性の家」の中に「子どもの家」¹¹⁾を設立していたのである。さて、モンテッソーリの父親の生涯の最後の数ヶ月を親身になって介護しその最後を看取ったのは同じく彼女の愛弟子の一人アンナ・フェデーリであった。アンナ・フェデーリは、その年のクリスマス¹²⁾の時期にバルセロナに向かい、その地でモンテッソーリたちと合流する。理由は明らかではないが、モンテッソーリは父親の葬儀のためにも墓参にもついにローマには帰らなかった。

ところで、バルセロナでアンナ・マリア・マッケローニを援助し助言したのは前述のファン・パラウ・ヴェーラ教授であった。彼は『方法』のスペイン語

版の翻訳者であり、無政府主義者としての波乱に富んだ若い時期を過ごした後、今では厳格なカトリック信者として教育における宗教のあり方を追求していた。「母性の家」に併設された「子どもの家」においては小さな空間が「礼拝堂」あるいは「祈りの空間」として用いられるようになっていた。そしてそこで、キリスト教的な宗教的象徴の学習のための教具の研究がモンテッソーリとアンナ・マリア・マッケローニによって行われ、宗教教育をめぐる思索が深められた。その結果、1922年に『教会に生きる子どもたち』“*I bambini viventi nella Chiesa*”が、1931年と1932年にカトリック教育に関する二つの著作が日の目を見ることになった。『キリストの生涯』“*La vita in Cristo*”と『子どもたちに説明される聖ミサ』“*La santa messa spiegata ai bambini*”である。モンテッソーリは、『方法』においては宗教的感情の根源と子どもの宗教的感情の発達についての研究に意欲を燃やしていた。しかし上記の著作においてはその方向は放棄されている。むしろそのねらいのポイントは、宗教教育をいかに行うかについての教育方法的な概説にしぼられている。

スペインにおいては1909年の『方法』が出版された直後に、『方法』の理論を宗教教育にいかに適用するかが宗教関係者たちによって真剣に考えられた時期があった。モンテッソーリはそのことを思い起こしながら、1922年の著書『教会に生きる子どもたち』の中で「私は『方法』の中では特定の宗教的信仰の表明は行ってはいなかった」と述べている。しかし、今は、彼女はカトリックの信仰の立場に立っていた。幼児に宗教的本能が存在するか否かの問題について結論を得ないままであることには変わりにはなかった。しかし、モンテッソーリは適応のための原初的な本能を追究する人類学的な観点からこの問題に迫ろうとしている。子どもは環境からすべてのものを吸収する。そして、まさにその環境のもとで子どもは宗教的なものを含むあらゆる精神的なものをも吸収しつつ生きている。しかし、人間の適応は、情緒的、認知的、文化的にいずれの方向においても人によってその活動性が異なる。その意味で人間は個別的特質を持っている。子どもは環境的現実においてその個別的特性を通じて遭遇する刺激を自らのうちに取り入れるのである。「ここに幼児期の宗教教育のため

に完成すべき必要な事柄がある。それは以下のことだ。すなわち、典礼を子どもに受け入れやすいものにする¹³⁾こと、教会の荘厳なる働きについて、聖なるものの象徴性について、すべての事物の根源的な道理について、聖務の厳格な配置について子どもに理解させることである（『教会に生きる子どもたち』）。

さて、1915年3月にバルセロナでアンナ・マリア・マッケローニによって5名の子どもたちを受け入れて始められた「子どもの家」は、数ヵ月後にはモンテッソーリ・スクール (Escola Montessori) に発展した。それは3歳児から10歳児のための幼児教育ならびに初等教育を行う学校であり、そこにはモンテッソーリ教育法の研究・訓練・教育のための教育研究所 (Seminari Laboratori de Pedagogià) も付置されていた。これは、カタロニア政府が自分たちの言語、学校、独立政府を作り上げる計画の一部として行った援助により実現したものであった。その学校は同年10月には100名以上の子どもが在籍する教育機関¹⁴⁾に発展していた。この学校の実践を背景にしてバルセロナ国際教師養成コースが開催されることになる。

バルセロナにおいて第4回国際教師養成コースが開催されたのは1916年2月中旬である。参加者たちの大多数はバルセロナなどカタロニア地方出身の教師であった。しかし、ポルトガル、英国、カナダ、ラテン・アメリカ諸国からの参加者もあり総勢185人が受講した。この講習会では、6歳以上の子どもたちを対象とする算数、幾何学、文法のための新しい教具の提示が行われた。幼児のために開発された科学的な教具の原理と方向性は6歳以上の子どもたちの教育にとっても有効なのではないかとする仮説は以前から存在した。そしてそのための実験もすでに行われていた。その実験は、モンテッソーリを中心にして彼女の忠実な協力者であり友人でもあるドンナ・マリア・マライーニ・グエッリエーリ、アンナ・フェデーリ、アンナ・マリア・マッケローニなどの集団的な活動として展開された。その成果が『小学校における自己教育』¹⁵⁾ “*L'autoeducazione nelle scuole elementari*” (1916) である。バルセロナの国際教師養成コースに参加した受講生の一人が、この講習会の内容に関する印象

をイギリスの家族に書き送っている。

「従来のアバクス（子どもに計算を教えるわが国のソロバンに似た計算機—筆者）や移動可能な幾何学図形がモンテッソーリの自己教育における自由の原理にしたがって算数の学習に使用されると、これらの教具はまったく新たな様相を呈する。文法的分析は7歳から10歳までの子どもには手に余る課題のように見える。しかし、モンテッソーリ・スクールで学んだ子どもたちにとっては、それらは驚くほど容易なことだ。品詞の知識や正しい用法はゲームとして獲得される。そのやり方で、子どもは楽々と文章をつくり、しかもエレガントな文章をつくる。名詞、動詞、前置詞などと書かれた厚紙のカードを単に並べかえるだけで、考えが明瞭になり表現が容易になるように見える。もっとも正しい幼児教育法は感覚を通じて行われる、とするセガンの後継者としてのモンテッソーリの主張は、実際の成果によって完全に実証されている。さらに、その原理は幼児よりもずっと上の子どもにも適用可能だと私には思われる。私は、バルセロナの学校やパルマやマジョルカの素晴らしい学校で、触覚が学習の助けに用いられた驚くべき成果を十分に観察する機会に恵まれた。このモンテッソーリ法のシステム全体が、手のつけられない幼いいたずらっ子を、楽しそうに勉強に精を出す生徒に変えてしまう、素晴らしい方法を持っている。これらの子どもは、おとなしく、勤勉で、行儀よくすることを本来望んでいるのだ¹⁶⁾」。

モンテッソーリは1916年の10月にまたもや米国に旅立ち、翌17年の初めの数ヶ月間を米国で過ごした。ニューヨークの児童教育基金（the Child Education Foundation）で講演を行うためである。しかし今回の彼女に対する米国の空気は冷たく厳しいものであった。1914年にはすでにW.H. キルパトリックによるM. モンテッソーリへの批判が始まっていた。彼はローマの「子どもの家」を見学して『モンテッソーリ・システムの考察』（“*The Montessori System Examined*”）と題する小冊子を著し、その中でモンテッソーリ法があまりに機械的、形式的、硬直的であるとして批判した。そして1916年にはJ. デュエイが『民主主義と教育』において批判を行った。その要点は、モンテッ

ソーリの教具が子どもたちの現実的生活と具体的経験から切り離された、あまりに人為的なものであるという点にあった。イタリア国内においても米国においても、モンテッソーリ教育に対する厳しい評価がしだいに広まりつつあった。

3 イタリアにおけるモンテッソーリ教育への批判

モンテッソーリ教育に対する批判はすでに1909年の『方法』出版の直後から見られる。その中で特に『方法』に対して厳しい批判を行った代表的人物は、グイド・デッラ・ヴァッレ (Guido Della Valle) である。彼は『教育学誌』 (*Rivista pedagogica*) の編集長として1912年から1916年まで活躍した論客でありカント研究者でもある。彼は同誌の1911年1月号に『「子どもの家」とモンテッソーリの「科学的教育学」』と題する論文を発表した。それによると、モンテッソーリの1909年の『方法』は一種の偉大なる容器であり、「そこには、赤ん坊に離乳食を準備し、大きな子どもの食事に味付けするやり方から聖フランチェスコでさえも及ばない愛についてのお説教まで、すべてのことについてつまみ食いの的に少しずつ (dove c'è un po' di tutto) 触れられている」。結論的に、デッラ・ヴァッレは、『方法』から「若干の実際的な新しい提案を行っている数頁を引き抜いて」残しておき、「すべての教育方法的議論はやめにして」、この『方法』の出版は中止され、それらは市場からすべて回収されるべきだと勧告している。さらに、モンテッソーリに対する個人的攻撃と思われる批判も行われている。彼は、「子どもの家」の全面的閉鎖を呼びかける。それがフレーベルやイタリアの幼児教育の開拓者アポルティの実践の焼き直しに過ぎないからだとの理由からである。「子どもの家」ならびにそこで適用されている教育方法はオリジナリティを欠く旧態依然たるものであり、むしろモンテッソーリは本来の医者として医学の道に専心するのが望ましいのではないかと¹⁷⁾している。

カトリック陣営からも『方法』に対しては『カトリック文明』誌 (*La Civiltà Cattolica*) を中心にして多くの批判が行われた。同誌1910年1月号掲

載の『新しい建築改革と教育学』(*Una nuova riforma edilizia e pedagogia*)は、条件付ながら「子どもの家」の実験に対して大きな関心を示している。それによると、『方法』の積極的に評価されるべき箇所は、教具・教材、教育の場の組織化、身体的生活についての配慮に関する部分である。しかしながら一方では、自由にもとづく規律の原理、褒美と罰の廃止、観察者としての教師の役割などは、大人による教育の必要性やローマ教会の「原罪」の教えを度外視しているもので、モンテッソーリが子どもを自己充足的(un bambino “autosufficiente”)な存在として考えた結果によるものだと批判している¹⁸⁾。

モンテッソーリは、しだいにヨーロッパならびに米国における講演旅行ならびにモンテッソーリ教育教員養成コースの仕事に忙殺されるようになる。一方、イタリアにおいてはそのモンテッソーリ法にたいする多くの批判がますます厳しく行われるようになる。その代表的なもののいくつかについて見てみよう。

1919年に出版された『教育的パラドックス』(*Paradossi educative*, Roma, La Voce Editorice)の「モンテッソーリ法」を論じた章においてG. プレッツォリーニ(Prezzolini)はモンテッソーリが子どもたちのために新しい教育的な環境を整備して「子どもの家」の実験を行っていることは高く評価している。しかし、彼はこの方法がモンテッソーリによって独創的に開発されたものであることを認めず、それが彼女の功績であることを否認している。それは、彼女が細心の注意を払ってこれまでの先人たちの実際的な示唆や助言を集約した結果によるものに過ぎず、その方法の積極的な成果は、むしろ教師たちの諸能力に大きく依存している。彼女の方法は教育学としては確立されておらず、その理論的基礎も脆弱である。G. プレッツォリーニによれば、モンテッソーリの業績として評価できることは、「子どもの家」における教育実践のみであると¹⁹⁾されている。

C. ザンツィ(Zanzi)は1918年の『教育学誌』(*Rivista pedagogica*)1・2月号および3・4月号における『モンテッソーリの子どもの家』(*Le Case dei Bambini della Montessori*)と題する論文においてモンテッソーリ批判を展開

している。C. ザンツィは、モンテッソーリは今日の教育学にすでに存在する諸原理を拾い集めているのみで彼女の手法と呼ばれるものは存在しないと主張した。そして、彼女の業績をまったく認めようとしない。彼はモンテッソーリの独創性の欠如という批判に加えて、教育の過程におけるモンテッソーリ教育の過剰な個人主義の重視を批判している。そして、そのために彼女は一人ひとりの子どもの可能性が社会的な環境において発現されるという事実を正しく評価できないでいるとしている。²⁰⁾

U. スピリト (Spirito) は『教育学誌』(*Rivista pedagogica*) の1921年1・2月号に論文『モンテッソーリ法の根本的過ち』(*L'errore fondamentale del metodo Montessori*) を発表した。U. スピリトによると、モンテッソーリ法の根底には純粹なる自由意志としての自由に関する否定的概念、ならびに教具が教師の代わりをすることが必要だと考える教育に関する否定的概念が存在する。モンテッソーリ教育の根本的誤りはこの点にある。「わくわくするような精気に満ちた教師の声に対して、寒々しくて血の通っていない教具が取って代わっている。そして、その教具を通して…モンテッソーリは子どもに語りかけるのだ」。U. スピリトは、教育活動に機械主義が持ち込まれているとしてモンテッソーリを全面的に批判している。²¹⁾

G. ジェンティーレ (Gentile) は1922年の『国民教育』(*L'Educazione Nazionale*) 誌の7月号に論文『モンテッソーリ法について』(*Il metodo Montessori*) を発表した。彼は視学委員会のメンバーの一員としてローマ市内の二つの小学校を訪問し、モンテッソーリ法をすでに具体的に見学する機会に恵まれていた。そして、モンテッソーリ法に対してきわめて好意的な評価を行い、ローマ市に対してこの実験的教育が継続されるように政府に補助金を申請するよう提言している。しかし、その対象とされたのは第1学年と第2学年のみであった。学校視察の結果、G. ジェンティーレが注目したのは、自己教育の実践によって子どもたちに画一性・受動性が見られなくなっていることであった。このやり方が、子どもの内的な様々な力を解き放っていると彼は考えた。さらに、モンテッソーリ教育の組織化の積極的な面についても注目を行っている。しかし他

方で、G. ジェンティーレはいくつかの問題点も指摘している。それは、子どもたちの集中に見られる個人主義的態度、自己表現のための手段・方法に制約が見られること、第4学年・第5学年における文化一般についての学習内容が貧弱であることなどであった。すなわち、G. ジェンティーレはモンテッソーリ法の有効な可能性と問題点について述べながら、この教育法が小学校低学年の子どもたちに適したものであるとの評価を行っている²²⁾。

さて、教育学者の中でモンテッソーリの『方法』に対して最も辛らつで徹底的な批判を行ったのはジュゼッペ・ロムバルド・ラディーチェ (Giuseppe Lombardo Radice, 187-1938) である。彼は、文部大臣の職にあったG. ジェンティーレに請われて文部事務次官に就任し、1923年のジェンティーレ教育改革遂行の中心人物として陣頭指揮をとり改革に大きな影響力を残した大学教授である。1923年の『小学校学習指導要領』(I programmi) も彼の手によって作成された。そのロムバルド・ラディーチェが『国民教育』(L'Educazione Nazionale) 誌1926年第7月号に『「科学的教育学の方法」の新しいエディションについて』(La nuova edizione del 《Metodo della Pedagogia Scientifica》 di Maria Montessori) を発表した。これは、G. ジェンティーレが主宰するモンテッソーリ後援会を辞退する言葉として執筆されたものである。

1909年の『方法』の再改訂版が1926年に出版された。1909年から1913年までの『方法』の最初の頁には次のような献辞が印刷されていた。「高貴な女性アリス・フランケッティ・ハルガルテン男爵夫人ならびにイタリア王国上院議員レオポルド・フランケッティ男爵にこの書を捧げます。この書はお二人のご要望とご援助により今日出版されます。この書は、「子どもの家」を科学的文献において洗礼を施すことにより考察されたものであります」(ALLA NOBIL DONNA | BARONESSA ALICE FRANCHETTI-HALLGARTEN | E AL BARONE LEOPOLDO FRANCHETTI | SENATORE DEL REGNO | DEDICO QUESTO LIBRO | CHE È STATO DA LORO VOLUTO | E CHE PER OPERA LORO ESCE OGGI | ALLA VITA DEL PENSIERO | BATTEZZANDO NELLA LETTERATURA SCIENTIFICA | LE 《CASE

DEI BAMBINI²³⁾。

しかしながら 1926 年『方法』改訂版においてはこの献辞が削除された。そしてこれまで存在しなかった文章が「第 3 版への序文」(INTRODUZIONE ALLA III EDUZIONE)²⁴⁾として加えられている。そこには教皇ベネディクトゥス 15 世 (在位 1914-1922) による 1918 年 11 月 21 日の日付のある祝福の言葉が掲載されている。教皇ベネディクトゥス 15 世は 1918 年 11 月にモンテッソーリを接見し、その直後にヴァチカン図書館に彼女の図書を購入するよう命じた。さらに教皇はモンテッソーリに祝福の言葉を書き送った。そこには「愛する娘 M. モンテッソーリにわれわれが与えるローマ教皇の祝福が『方法』をより豊かなものとする天の恵みと恩寵に満ちたものとなりますように」と記²⁵⁾されていた。モンテッソーリは この教皇ベネディクトゥス 15 世の祝福のこたばを 1926 年改訂版『方法』の最初の頁に飾ったのである。

ロムバルド・ラディーチェの『方法』に対する批判の中心におかれたのが、このフランケッティ男爵夫妻への献辞の削除に象徴されるモンテッソーリの変貌についてであった。この献辞の削除は、背後からモンテッソーリを支援し、『方法』を誕生にまで導いた恩人に対する許しがたい忘恩だと彼は批判している。彼によると、モンテッソーリは「フランケッティ的精神」を喪失することによって、彼女が寄って立つ基盤を非イタリア的なもの (una evoluzione non italiana) へと変貌させてしまった。いまやモンテッソーリの仕事に対して積極的なものとして対置されるのはアガッティ姉妹の幼児教育のみである。それがイタリア的伝統を脈々と伝えているからである。ロムバルド・ラディーチェは、結論的にモンテッソーリを次のように評価している。先ず「子どもの家」の教育的な原理は確かに積極的に評価されるべきだ。それは、「子どもの家」が学校ではなく、子どもたちがその能力を各自で試しながら自由に行動できる環境であるからである。しかるに、他方で彼女は「教育の標準化の傾向ならびに教具一式による訓練が常にどこでも行われるべきだとしている。このモンテッソーリの主張」²⁶⁾は受け入れられないとして退けている。

モンテッソーリは、前述したように 1926 年改訂版の序文に教皇ベネディク

トッス 15 世の祝福の言葉を掲げた。そしてこの改訂版から新しく宗教教育の章が付け加えられた。しかしカトリック陣営からのモンテッソーリに対する批判は繰り返され強まっていった。すでに 1917 年に米国のカリフォルニアでモンテッソーリ・スクールを開設していたマリオ・モンテッソーリのもとにカトリックの司祭が訪れた。彼はマリオに対して「モンテッソーリの教育哲学は原罪思想を無視している」と非難した。²⁷⁾これは、まさにローマ教会とモンテッソーリとの関係におけるアンビバレントな問題であった。教皇ピウス 11 世(在位 1922-1939)によって 1929 年に回勅「青少年のキリスト教的教育」(Divini illius magistri)が出された。これは間接的にはあるがモンテッソーリの『方法』に言及して、子どもの中には原罪のあらゆる結果が存在しているとして「特に意思の薄弱さ、無規律な傾向」にそれが現れているとした。²⁸⁾しかし、モンテッソーリの基本的考えによれば、子どもは「白紙」(vuoto)であって赦されるべき何ごとも、解放されるべき「罪」も犯していない。「罪」(peccato)と「過ち」(corpa)は文化の中で墮落させられた大人たちの内面的な生活に属する観念なのだ。モンテッソーリは黙して反抗した。彼女は自分の考えを発展させ実践する空間を持つためにイタリアの国外に目を向けていた。

4 ファシズムとモンテッソーリ

ベニート・ムッソリーニとその黒シャツ党は 1922 年 10 月ローマに向けて進軍を開始し、第一次世界大戦後の深刻な社会不安や政治的動乱を背景に政権を獲得した。ここにイタリアは一国一党制のファシスト国家としてその歩みを始めることになる。この時期にイタリアの文部大臣に就任していたのはアントニオ・アニーレである。彼は 1922 年 2 月 22 日から 10 月 30 日まで在任し、1922 年 10 月 31 日からファシスト政府の文部大臣としてジョヴァンニ・ジェンティーレが文部行政に当たることになる。²⁹⁾

A. アニーレは、ナポリ大学の歴史学教授の経歴を持つ医学博士でありモンテッソーリの友人でもあった。1922 年の春、文部大臣 A. アニーレは公的な立場においてモンテッソーリを招聘し、彼女はナポリで講義を行った。当時、ナ

ポリ市は貧民街にモデル・スクールとしてモンテッソーリ・スクールを開設し、低所得者層に属する家庭の3歳児から7歳児までの300人を受け入れ、そのうちの150人に対しては全日制の、残りの150人に対しては定時制の教育を行っていた。そして、当初、手に負えない状態にあった子どもたちが従順で注意深く、しかも活動的な子どもへと大きく変化したことが注目され話題を呼んでいた。もともと、その学校は素晴らしい教育的成果を上げたにもかかわらず、厳しい財政的・経済的な状態の深刻化を理由に数年後には閉鎖されることになる。³⁰⁾

A. アニーレは、1922年4月、イタリア滞在中のモンテッソーリに対してローマ市内のモンテッソーリ法による公立保育園ならびに小学校の実情の視察を行うように依頼した。第一次世界大戦の数年前からイタリアにおけるモンテッソーリ教育は、モンテッソーリの直接の指導の手を離れていたのである。彼女は、同年5月から視察をイタリア全土のモンテッソーリ学校に拡大した。その結果、ローマ市内の2校の閉鎖を勧告した。それらがモンテッソーリ法の教育をまったく理解していないのみならず、彼女が助言指導を行っても彼ら流の教育法に固執してモンテッソーリ教育の受け入れを拒否したからである。³¹⁾ イタリア政府は、モンテッソーリの協力を得てモンテッソーリ法の導入により教育の強化をはかる計画を持っていた。しかし、10月31日のファシスト政権の成立によって前政権は退陣し、G. ジェンティーレが新たに文部大臣に就任する。

著明な哲学者であり大学教授でもあったG. ジェンティーレはファシスト政権に対して過大な期待と幻想を抱いていた。しかし彼は、1859年に公布されたカザーティ法による旧イタリアの教育制度の全面的な改革を1923年に断行する。後に「ジェンティーレ教育改革」として知られる今日のイタリア学校制度の基礎をなすものである。教育改革を推し進めるG. ジェンティーレにとって、当然ながらモンテッソーリの存在とモンテッソーリ法の国際的な評価はその視野のなかにおさめられていた。

さて、すでに1918年にナポリにおいて「モンテッソーリ教育法友の会」

(Società Amici del metodo Montessori) が結成されていた。これはモンテッソーリ教育の研究とモンテッソーリ法普及のための施設の設立・組織化のセンターの実現を目標としていた。³²⁾ G. ジェンティーレはこの「友の会」の実質的な責任者のポストについた。それが1924年8月8日の勅令により法人「全国モンテッソーリ協会」(L'Ente Morale Opera Montessori) に改変されて新たな組織として設立されることとなる。モンテッソーリがその名誉会長に、G. ジェンティーレが会長の地位についた。さらに、1926年2月には勅令により「教師養成のためのモンテッソーリ・コース」(il corso Montessori per la formazione degli insegnanti) が組織された。それはミラノの人道主義協会において6ヶ月コースの講習会として開催された。時の文部大臣はG. ジェンティーレに代わってピエートロ・フェデーレ (Pietro Fedele) がその職にあった。P. フェデーレは、このコース実施の責任をモンテッソーリに委嘱した。

コースの計画は細部にいたるまでモンテッソーリによって内容が練り上げられ、彼女がその総指揮にあたった。コース参加登録者は1万8千60人へのほり、その中にはモンテッソーリの勧告によって閉鎖となったローマにおけるモンテッソーリ・スクール再開のためにローマ市から派遣された3名の教師、地元ミラノの教師たちの他に、ロンバルディア地方から25名、マルケ地方から17名、ヴェネト地方からの18名が含まれていた。この講習会の名誉監督者の役職を引き受けたムッソリーニは、すでに全国モンテッソーリ協会の会長職にも就任しており、彼の個人資産から助成金として1万里ラを協会に対して寄贈するなどモンテッソーリ教育の普及に強い関心を示していた。³³⁾

1927年6月には全国モンテッソーリ協会の機関紙『モンテッソーリの思想』(L'Idea Montessori) の創刊号が発刊された。その協会は、ムッソリーニが名誉会長、文部大臣、植民地大臣が副会長のポストにつき、会員にはG. ジェンティーレなど著名人や高官が名を連ねていた。創刊号の内容は、11カ国におけるモンテッソーリ教育運動、イタリアにおけるモンテッソーリ・スクールの情報、モンテッソーリ法に関する記事などが掲載され、モンテッソーリ自身による序文も添えられていた。そこには、自分の仕事の目的は「教育の方法を創

案するというより、一人ひとりの子どもが、大人に妨げられることなく援助されて、精神的かつ身体的に十分に成長する権利を確立すること」であると述べられていた。³⁴⁾モンテッソーリはファシズムの本質に対して未だに盲目であった。国際的視野を持つ人物でありながら、彼女はムッソリーニがモンテッソーリ法普及のための深い理解者であり善意の後援者であるとの大いなる幻想を抱き続けていたのである。

さて、ムッソリーニは、すでに1927年12月に閣僚会議にモンテッソーリ法による教員養成学校設立を内容とする法令草案を諮っていた。これが1929年には政府公認の王立モンテッソーリ教師師範学校 (Regia Scuola Magistrale di Metodo Montessori) として創設されることになった。この教師養成学校はモンテッソーリ教育の実習ならびにデモンストレーションも行い、将来、国際教師養成コースを開催することも考慮に入れられていた。ローマ市内のモンテ・マリオ地区のモンテ・ゼビオ通り (Via Monte Zebio, 35) にその目的のための建物が政府から与えられた。それは、建物の細部にまでモンテッソーリの意向が取り入れられていた。教育内容はモンテッソーリ教育、宗教教育とともに「ファシスト文化」が中心とされた。モンテッソーリ教育はファシスト政府の全面的後援のもとに展開されているかに見えた。³⁵⁾

モンテッソーリ教育は、1929年-1930年にはファシスト政府の後ろ盾のもとにイタリアにおいて絶頂期を迎えていた。1930年の冬にイタリア政府主催、全国モンテッソーリ協会後援による国際教師養成6ヶ月コースの計画が発表された。ムッソリーニは、この第一次世界大戦後に初めてイタリアで開催される国際教師養成コースの名誉総裁職を引き受けた。彼は、そうすることによってモンテッソーリに最高の栄誉を与えたのである。しかし、実質的には総裁の仕事はG. ジェンティーレによって遂行された。当時のニュースはこの国際コースの開催について次のように伝えている。「イタリア政府がこの開催をいかに重視しているかは、外務大臣が外国に対する宣伝を積極的に引く受け、文部大臣がイタリアの主要都市に対して各2名の教師をコースに派遣するよう要請した事実に示されている。イタリア政府が、個人によって考案された教育方法に

このような関心を抱いたのは史上初めてのことである³⁶⁾。このコースは、21 개국から 100 名の受講生を受け入れた。モンテッソーリは週 3 回の講義を行³⁷⁾た。さらに彼女の指導のもとで教具の使用法の実演が 70 回実施された。

さて、モンテッソーリとムッソリーニの関係について見てみよう。この両者の組み合わせは今日から見ると水と油の関係である。それが束の間のことであるとは言え二人の間に友好関係が成立し得たかに見えるのはどうしてか。ムッソリーニの希望で 1924 年にイタリア滞在中のモンテッソーリとムッソリーニの会談が実現した。ムッソリーニには、世界的にその名前が著明なモンテッソーリの威信がファシスト・イタリアの国家建設に栄光を添えるであろうと考えた。一方、モンテッソーリはその新しい国家が暴力と流血によって建設されることになろうなどは気づきもしなかった。祖国イタリアにおけるモンテッソーリ法の普及を念願していた彼女は、この会談において、自分の夢の実現のためには意志と行動力のある人物が必要だとムッソリーニに語った。それに対して、ファシスト党日刊機関紙によると、ムッソリーニがそれを「私がやろう」(“Farò io!”)と答えたという³⁸⁾。かくて、モンテッソーリ法は新しいファシスト政府によって支援されることになった。

しかし、モンテッソーリとムッソリーニの考え方には当初から基本的な相違と矛盾が見られた。当時、「国家的品位」(decoro nazionale)の問題が強調されていたが、この言葉の意味をめぐってもモンテッソーリとムッソリーニとでは理解がまったく異なっていた。例えば、モンテッソーリは、祖国の首都ローマが全世界から注目されるモンテッソーリ教育の中心地になることを願っていた。それは彼女の『方法』が普遍的性格の教育を目指すものであるからであり、その実現のために国際的な関係の網の目の中心としてローマがその役割を果たすべきだと考えたからであった。しかし、彼女が祖国を語る時、それはイタリアのみを意味しなかった。それは世界的視野における祖国でなければならなかった。愛国的で国民的祖国を強調する受講生に対して、モンテッソーリは「祖国とは何か。私たちは普遍的祖国のみを持っているのです」と述べた³⁹⁾。

ムッソリーニは、1924 年 2 月に外務省に対して世界中のイタリア領事館が

モンテッソーリ教育の各国における実情と影響力について調査するよう指令を発した。その結果、英国の主要都市でイタリア語として人々に知られているものは僅かに二つしかなく、それは「マルコーニの電信機」(il telegrafo Marconi)と「モンテッソーリ教育法」(il metodo Montessori)であることが明確になった。つまり、それらは「祖国という荘厳なる名前に結びついた二つの力、二人の天才である」ことが明らかになった。⁴⁰⁾ ムッソリーニは、モンテッソーリに対してその国際的名声を批判することは敢えてしなかった。しかし彼は、彼女の教育学の根底にある「イタリア性」(l'italianità)に注目しそれを強調した。それは、まさにロムバルド・ラディーチェがモンテッソーリに対して非イタリア的であるとして批判したのとは反対の姿勢であった。ムッソリーニは国粋主義を力説しながら、モンテッソーリ思想の国際性を過小評価し見くびっていたのである。彼は、モンテッソーリの名前をファシスト国家建設に利用しながらモンテッソーリ教育の内容は骨抜きにする戦略に出た。「モンテッソーリなきモンテッソーリ主義」⁴¹⁾である。

モンテッソーリもムッソリーニも相互に相手を読み違えていた。モンテッソーリは、公的機関の施設・設備の利用によりモンテッソーリ法の普及発展が可能になると考えた。ムッソリーニは、モンテッソーリの秩序についての考え方に注目していた。秩序がファシスト国家建設のための従順な国民の形成のために大きな力を持つと考えたのだ。さらに、彼はモンテッソーリの名前がイタリア国家にもたらす威信の効果も考えていたであろう。両者の考え方の違いはファシズム体制の進展とともにその溝が深まり、事態は深刻化していった。1929年には国際モンテッソーリ協会(Associazione Montessori Internazionale=AMI)が結成された。これは、世界における平和の確立の必要を訴え続けるモンテッソーリを支援する国際的な組織の側面を持っていた。その後援者には、世界的に著明な人々、例えばジークムント・フロイト、グリエルモ・マルコーニ、ヤン・マサリク(チェコスロバキア外相)、ジャン・ピアジェ、ラビンドラーナート・タゴールなどが名を連ねていた。彼らはモンテッソーリを援護する国際軍団のようにさえ見えた。ベルリンにその本部が置

かれ1935年にはアムステルダムに移った。この協会は、世界各地の学校や協会の活動を監督し、教師養成を管理するための母体となるものであった。

ついに、1932年にローマがモンテッソーリ運動の本拠地として発展するという期待は幻想に過ぎないことが明白になる事件が起きた。モンテッソーリは王立モンテッソーリ教育師範学校の教育学の講座の教授の候補者として自分の信頼する有能な弟子アデーレ・コスタ・ニョッキを推薦した。しかし、この学校の教育の責任者であるモンテッソーリの意向は退けられた。そのポストに就任したのは、モンテッソーリ自身の評価によると「モンテッソーリ法にはまったく無知である」人物であった⁴²⁾。これをきっかけにして、モンテッソーリとムッソリーニの関係の終りが始まる。1933年には、モンテッソーリは「もはやこの学校には、私の教育法のいかなる痕跡も見出せません」と述べた書簡を送り、王立モンテッソーリ教育師範学校の名称からモンテッソーリの表記を削除するように当時の全国モンテッソーリ協会長に求めた。この報告を受けたムッソリーニは、「いいだろう！あのモンテッソーリは大変にうるさい女だね」と答えたという⁴³⁾。

1934年4月にローマで開催された国際モンテッソーリ大会は、モンテッソーリとファシスト政府との決定的な決裂を示すものであった。その大会は、教育と平和についての彼女の講演の途中で、政府によって動員されたファシストの若者たちの怒号が乱れ飛ぶ混乱のうちに中止された。その直後にモンテッソーリは祖国イタリアを離れた。そして1947年まで祖国の土を踏むことはなかった。彼女は1916年から20年間を生活の本拠地としてバルセロナで過ごし、生涯の最後の15年間をオランダで過ごすのである。イタリア人であることに誇りを持ち、生涯イタリア語のみで講演を行い、祖国イタリアを愛し続けたモンテッソーリは、皮肉なことに祖国に安住の地を見出し得なかった。彼女の人間の尊厳と人間性の自由な自己展開を追究する真摯な姿勢が、そしてファシズムの激動の時代の荒波が彼女を祖国から遠ざけることになったのだと思われる。

モンテッソーリは1947年の春にイタリア政府の招聘により帰国した。同年

5月3日に憲法制定議会においてあいさつを行い、世界平和と文明についてのメッセージを伝えた。また、すでに77歳の高齢にもかかわらず、ローマ大学講堂において数回の講演会を開催し、イタリア学術会議において心理学に関する講演も行った。1947年末にはイタリア・モンテッソーリ協会が新綱領とともに再建された。翌1948年末にサン・レモで開催された第8回国際モンテッソーリ大会において、同協会は偉大なる教育者モンテッソーリをたたえて、「教育学研究センター」の設置について大会決議を行った。それは1950年にペルージャ外国人大学内に開設された。その最高責任者とされたモンテッソーリは、数回の授業をその大学で行った。しかし、その後、「センター」はベルガモとペルージャに置かれることになり、その具体的な活動は各センターにおいて展開されて現在に至っている。その中心は、国内外から参加する人々⁴⁴⁾に対するモンテッソーリ教育の教師養成である。「自国では尊敬されない予言者のように」見えたモンテッソーリは、戦後、祖国においてその影響力と輝きを一段と増し、彼女の教育の普遍性への認識は国際的な規模で深まりつつある。

¹⁾ Rita Kramer, *Maria Montessori, A Biography*, Da Capo Press, 1988, p. 278.

²⁾ ibidem, p. 146.

³⁾ Anna Maria Maccheroni, *Come conobbi Maria Montessori*, Vita dell'Infanzia, 1956, pp. 66-67.

⁴⁾ Sante Bucci, *Educazione dell'infanzia e pedagogia scientifica da Frobel a Montessori*, Bulzoni, 1990, p. 140.

⁵⁾ M. Montessori, *Il Metodo della Pedagogia Scientifica applicato all'educazione infantile nelle Case dei Bambini*, Edizione critica, Edizioni Opera Nazionale Montessori, 2000, pp. 676-677. “Anche il problema dell'educazione religiosa, la cui importanza ancora non sentiamo pienamente, dovrà essere risolto dalla pedagogia positive. Se le religioni nacquero insieme alle civiltà, esse ebbero probabilmente radice nell'umana natura. (...) Negando a priori il sentimento religioso nell'uomo, e privando l'umanità dell'educazione di questo sentimento, potremmo incorrere in un errore pedagogico, simile a quello che ci faceva a priori negare nel fanciullo l'amore alla conoscenza e al sapere:”

- ⁶⁾ Augusto Scocchera, *Maria Montessori, Una storia per il nostro tempo*, Edizioni Opera Nazionale Montessori, 1997, p. 181.
- ⁷⁾ Paola Trabalzini, *Maria Montessori da Il Metodo a La scoperta del bambino*, Aracne, p. 79.
- ⁸⁾ A. M. Maccheroni, *Come conobbi Maria Montessori*, cit., p. 69.
- ⁹⁾ P. Trabalzini, *Maria Montessori da Il Metodo a La scoperta del bambino*, cit., p. 82.
- ¹⁰⁾ A. M. Maccheroni, *Come conobbi Maria Montessori*, cit., p. 82.
- ¹¹⁾ P. Trabalzini, *Maria Montessori da Il Metodo a La scoperta del bambino*, cit., p. 87.
- ¹²⁾ Marjan Schwegman, *Maria Montessori*, il Mulino, 1999, p. 97.
- ¹³⁾ A. Scocchera, *Maria Montessori, Una storia per il nostro tempo*, cit., pp. 182-183.
- ¹⁴⁾ Rita Kramer, *Maria Montessori, A Biography*, cit., p. 249.
- ¹⁵⁾ P. Trabalzini, *Maria Montessori da Il Metodo a La scoperta del bambino*, cit., pp. 87-89.
- ¹⁶⁾ Rita Kramer, *Maria Montessori, A Biography*, cit., p. 249.
- ¹⁷⁾ P. Trabalzini, *Maria Montessori da Il Metodo a La scoperta del bambino*, cit., p. 80.
- ¹⁸⁾ ibidem, p. 81.
- ¹⁹⁾ ibidem, p. 90
- ²⁰⁾ ibidem, p. 90
- ²¹⁾ ibidem, p. 90
- ²²⁾ ibidem, p. 90
- ²³⁾ M. Montessori, *Il Metodo della Pedagogia Scientifica applicato all'educazione infantile nelle Case dei Bambini*, Edizione critica, cit., p. 59.
- ²⁴⁾ ibidem, p. 64.
- ²⁵⁾ Marjan Schwegman, *Maria Montessori*, cit., p. 99. “La benedizione apostolica che impartiamo alla diletta figlia Maria Montessori sia pegno di quelle grazie e di quei celesti favori che auguriamo per rendere fecondo di bene “Il Metodo della Pedagogia Scientifica applicator all'educazione infantile nelle case dei Bambini”.
- ²⁶⁾ P. Trabalzini, *Maria Montessori da Il Metodo a La scoperta del bambino*, cit., p. 98.
- ²⁷⁾ Rita Kramer, *Maria Montessori, A Biography*, cit., p. 225.
- ²⁸⁾ Marjan Schwegman, *Maria Montessori*, cit., p. 102.

- ²⁹⁾ G. Inzerillo, *Storia della politica scolastica in Italia*, Editori Riuniti, 1974, p. 284.
- ³⁰⁾ Rita Kramer, Maria Montessori, A Biography, cit., p. 279.
- ³¹⁾ ibidem, p. 279-280.
- ³²⁾ P. Trabalzini, *Maria Montessori da Il Metodo a La scoperta del bambino*, cit., p. 91.
- ³³⁾ Rita Kramer, Maria Montessori, A Biography, cit., p. 284-285.
- ³⁴⁾ ibidem, p. 303.
- ³⁵⁾ ibidem, p. 303-304.
- ³⁶⁾ ibidem, p. 311-312.
- ³⁷⁾ ibidem, p. 312-313.
- ³⁸⁾ ibidem, p. 282.
- ³⁹⁾ Marjan Schwegman, *Maria Montessori*, cit., p. 107. "Come patria, noi non abbiamo che la patria universale".
- ⁴⁰⁾ ibidem, p. 103. "Due forze, due genialità congiunte al nome augusto della Patria"
- ⁴¹⁾ ibidem, p. 106. "Montessorismo senza Montessori"
- ⁴²⁾ ibidem, p. 107. "Una completa ignoranza del metodo"
- ⁴³⁾ ibidem, p. 108. "Va bene — questa Montessori sembra sia una grande rompiscatole."
- ⁴⁴⁾ Tina Tomasi, *La scuola italiana dalla dittatura alla repubblica*, Editore Riuniti, 1976, p. 154.